

乳房外パジェット病について

乳房外パジェット病は皮膚癌の 1 つで、比較的稀です。日本では年間約 200 例の報告があり、皮膚癌の約 10%を占めると考えられています。

パジェット病は表皮内でパジェット細胞が増殖する疾患ですが、乳管上皮から発生して乳房(乳頭や乳輪)に進展する乳房パジェット病と、外陰や腋窩のアポクリン汗腺から発生する乳房外パジェット病に分類されています。乳房パジェット病は乳癌に準じるため主に外科で治療を行い、乳房外パジェット病は皮膚癌に準じるため主に皮膚科で治療を行います。

乳房外パジェット病の特徴は、境界不明瞭な紅斑と境界辺縁部の脱色素斑です。病状が進行すると、紅斑からびらんとなり、さらに結節が現れます。確定診断には皮膚生検を行います。基本的には表皮内の癌のため、転移を生じる可能性は低いと報告されています(約 15%)。

治療

①手術療法：乳房外パジェット病に対する治療の第一選択肢です。局所再発率が高いため、正常組織を 1cm 以上確保して切除します。2020 年から乳房外パジェット病に対するセンチネルリンパ節生検が保険承認されており、結節等の浸潤経口がある場合に行うことがあります。

②放射線治療：全身状態から手術が困難な場合は、放射線治療を行うこともあります。症例が少ないため、治療効果ははっきりしていません。

③薬物療法：乳房外パジェット病は症例が少ないため、有効性が確立された薬物療法はありません。ドセタキセルや 5FU+シスプラチンによる治療が報告されています。